

## 「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」 中間評価結果

大学名	慶應義塾大学
-----	--------

(総括評価) <b>B</b>	当初目的を達成するには、助言等を考慮し、より一層の改善と努力が必要と判断される。
--------------------	--

### (コメント)

慶應義塾大学の創立以来、国際化は建学理念実現の一手段と位置付けられており、翻訳メモリーソフトの導入、学内文書システムの英語化および日英併記の実施、非英語圏学生への対応、ダブルディグリープログラムの増加など、全学的な国際化は推進されている。また、本事業に先だって、研究科では英語で学位が取得できるコースが複数開設されており、中でも先端科学技術国際コースは優れていると認められる。

しかしながら、本事業としての具体的な取組み状況を見た場合、英語コースは研究科では2つ、学部では1つが開設されたが、今後、さらに実効性・スピードのある進展が望まれる。

海外拠点の設置、奨学金の創設、Web出願の導入、日本人・外国人学生混住の宿舍開設などによって、留学生受入れの環境が整備されており、全学として留学生は増加傾向にはあるが、本事業で実施しているコースで目標値を下回っているものや、取組み開始時に比べて減少したものがあなど、留学生の受け入れや日本人学生の海外派遣は依然として課題である。

加えて、専任外国人教員の増員について積極的に取り組んでいるとは見受けられず、外国人教員の数は目標値を大きく下回っており、本事業のために採用された教員は期限付き（特任）である上、外国人は少数である。

また、計画された連携プログラムに加えて新たなプログラムが実施されており、学生の確保のための拠点増設への努力が認められるが、交換留学生の拡大を目的とした協定校は増えたものの、2010年度末において受入れ、派遣ともに目標値を下回っている。

なお、教員の国際活動の実体的な質向上は依然として課題だが、ダブルディグリー等のカリキュラム・教材の共同開発や学生の相互指導を含めて共同研究開発は活発に進められている。

以上の状況から、本事業に先だって複数の取組みがあった半面、本事業として当初設定された目標を達成するため、今後、大学全体としてより一層の改善と努力が望まれる。とりわけ、専任外国人教員増加への全学的な取組みが必要である。